まとめ

今回、下層部分の調査で確認された弥生時代中期の遺構についてまとめます。

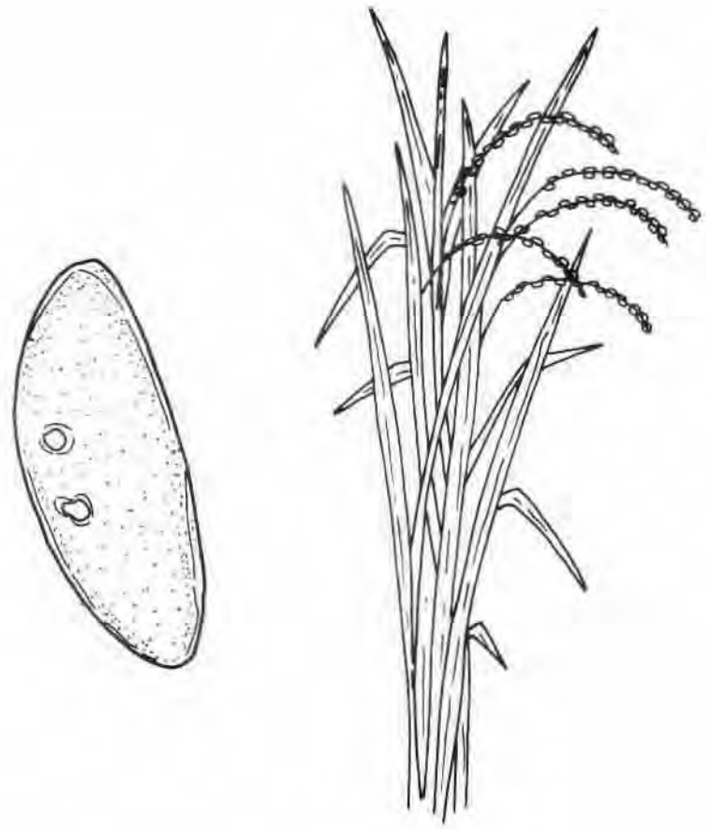
弥生時代中期の遺構は厚さ約1.3mの堆積土層内から4面が確認されました。水田遺構はすべて洪水によって埋没していました。しかし、弥生時代の人々は自然環境と戦いながら水山耕作を続けていたことがわかりました。弥生時代中期－②の面で見つかった堰は河川をせき止め、そこから水路をひき、水田に流す水利施設です。また、弥生時代中期－③の面で見つかった大畦畔は洪水などから生産域を護るために作られたものと思われます。これらは弥生時代の土木技術を究明する上で貴重な資料です。弥生時代中期－④の面では木棺墓がV字溝に囲まれたようなかたちで見つかっており、墓域を区画するものであったかもしれません。

以上、現在の下層部分の調査で確認された弥生時代中期の遺構であります。今後の整理によって当遺跡での、この時代の稲作技術の実態を明らかにしていきたい。

ーメモー

大竹西遺跡

現地説明会資料－Ⅱ



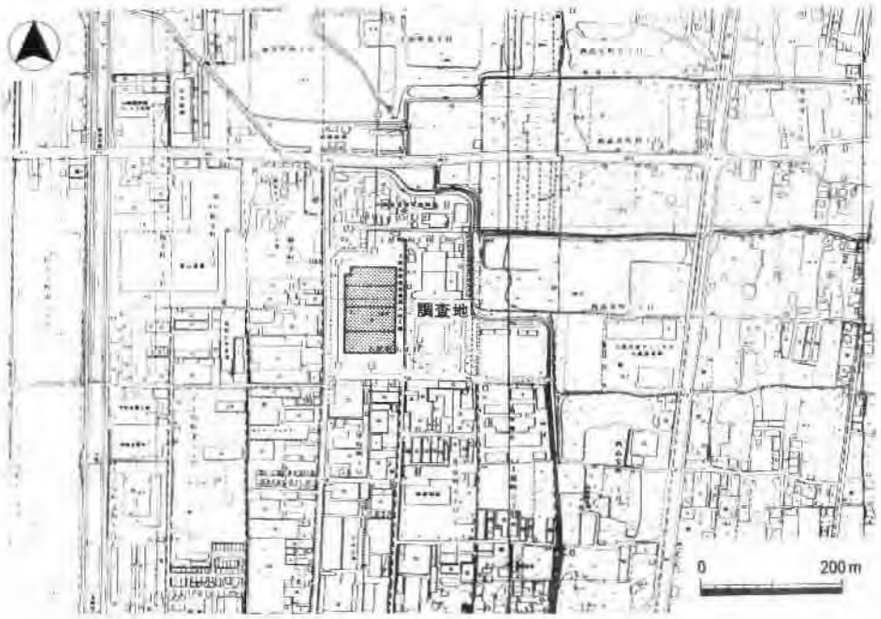
平成3年3月16日

八尾市教育委員会文化財室
㈶八尾市文化財調査研究会

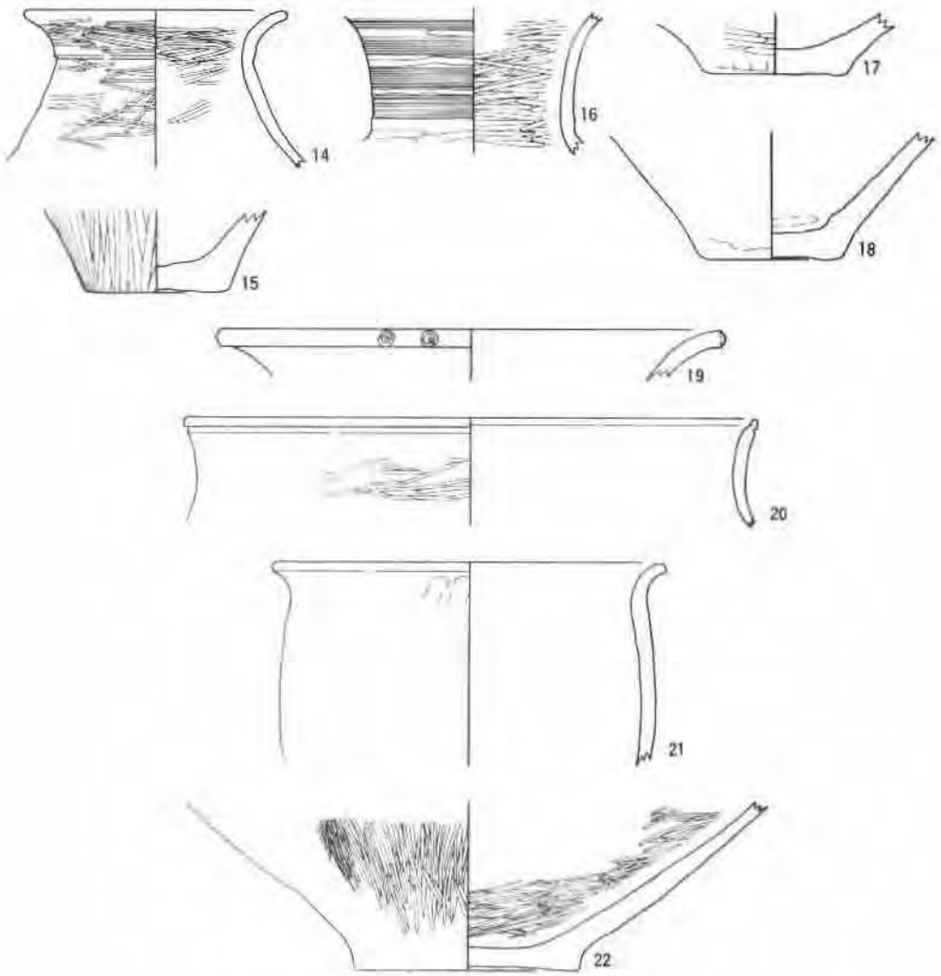
はじめに

大竹西遺跡は、八尾市の北西部の大竹、西高安町、上尾町にあたり、その周辺には、東に高安古墳群、西に福万寺遺跡、北に池島遺跡などが存在します。

調査は大阪市環境事業局八尾工場建替えに伴うもので、当遺跡内の西端部(海抜7.5m前後)の上尾町７丁目１番地内にあたります。発掘調査は調査区を４区に分け、平成２年６月から行っています。第一回（平成２年10月10日）の現地説明会では室町時代～弥生時代中期にかけての遺構が見つかっています。前回に見つかった遺構について簡単に説明します。まず、現地表下約３ｍのところから室町時代ごろの洪水によって埋まった水田遺構や河内郡条里区境界のあぜがが見つかりました。その下の面では、古墳時代前期の土坑・小穴・溝などの集落遺構、弥生時代後期末の土坑・溝が見つかっており、第２区の中央付近で見つかった古墳時代前期（布留式期）の土坑内から全国的にも出土例がない瑪瑙（めのう）製鏃形石製品が碧玉（へきぎょく）製管玉・ガラス製小玉・土器片とともに出土しました。鏃形石製品が碧玉と呼ばれる石材で作られたものが多く、通常古墳から発見されます。今回のように集落遺構で見つかったのははじめてです。さらにその下層の調査では弥生時代中期末の自然河川[illegible]の埋没した水田遺構が見つかりました。その後の調査を進めた結果、弥生時代中期の遺構面が４面（弥生時代中期―①～④）見つかりました。遺構には木棺墓・土坑・Ｖ字溝・堰（せき）・土墨状遺構(大畦畔)などが見つかっています。以下、今回の調査で見つかったものについて説明します。

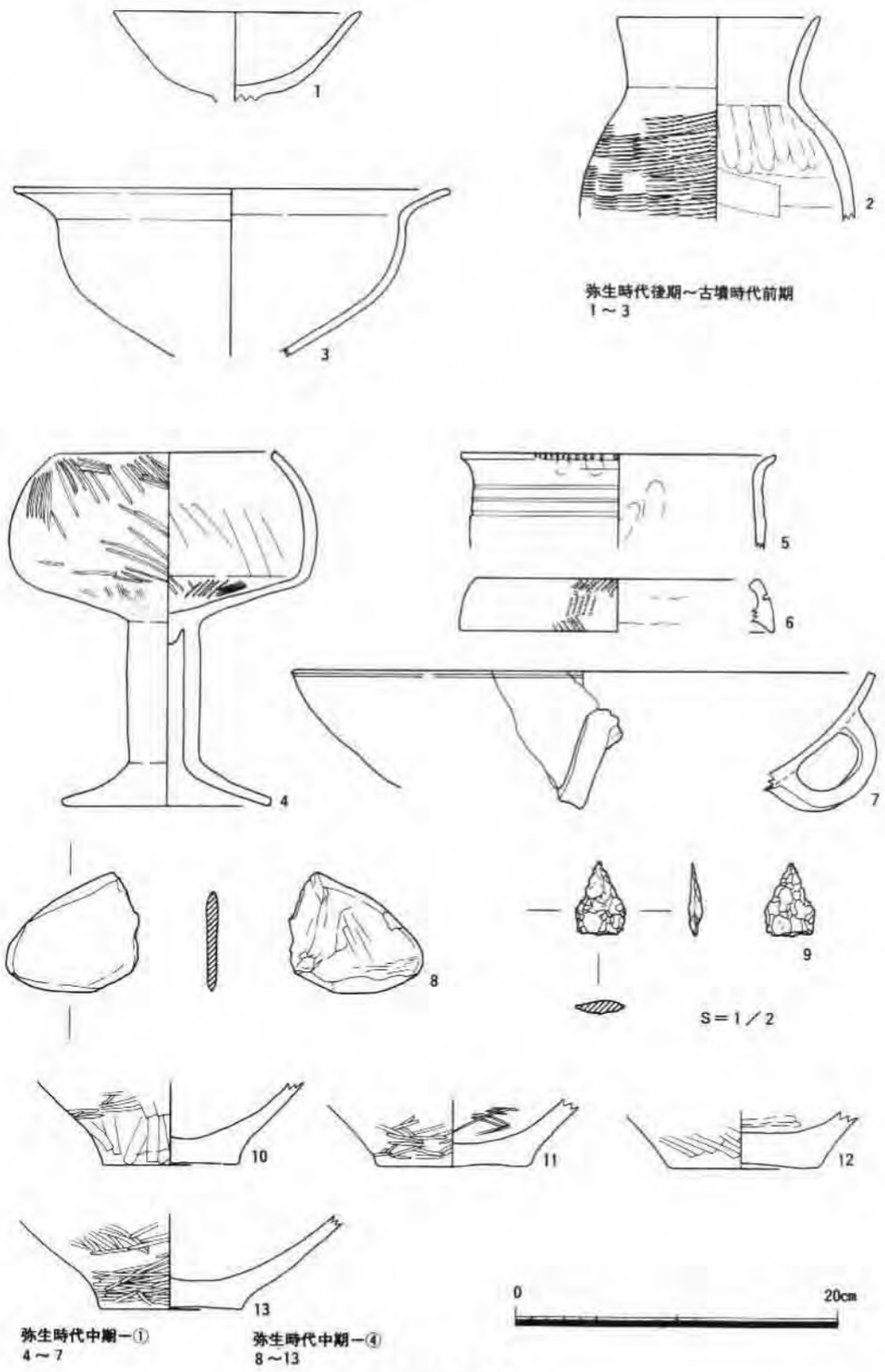


調査地位置図



弥生時代中期―④
溝１（14～18）　自然河川（19～22）

出土遺物実測図



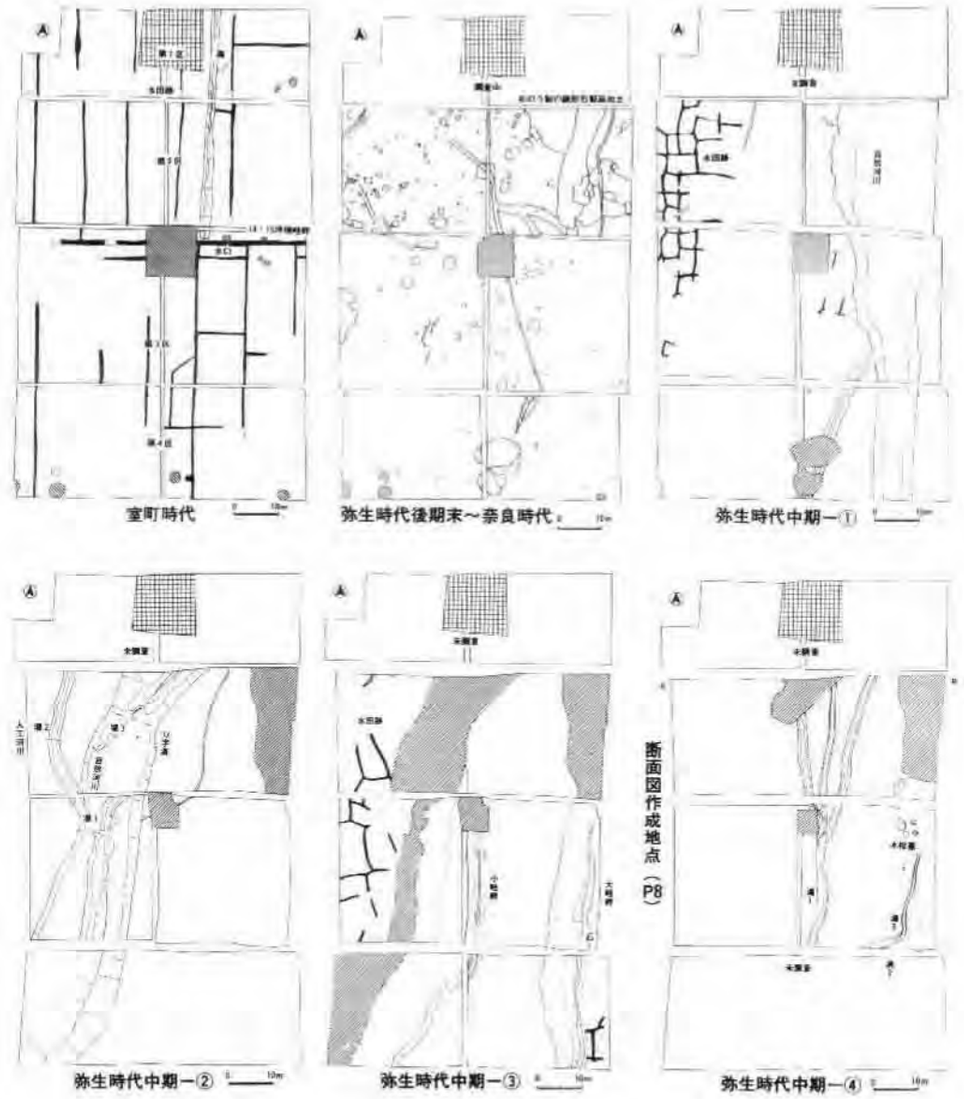
出土遺物実測図

調査の概要

弥生時代中期－①

第２・３・４区の調査を終了しました。

水田跡と自然河川が見つかりました。調査区の東側では南北方向の自然河川と第２区の東側からの自然河川と合流し、北方へ伸びています。この河川によって埋まった水田が西側で見つかりました。第２区では小区画したあぜが明瞭に残っていましたが、第３・４区では河川の氾濫によって削平されており、あぜの一部が残っていただけでした。



遺構平面図

弥生時代中期－②

第２・３・４区の調査を終了しました。

現地表下約3.8mの土層から人工河川・U字溝・自然河川が見つかりました。自然河川及び人工河川には堰が設けられていました。

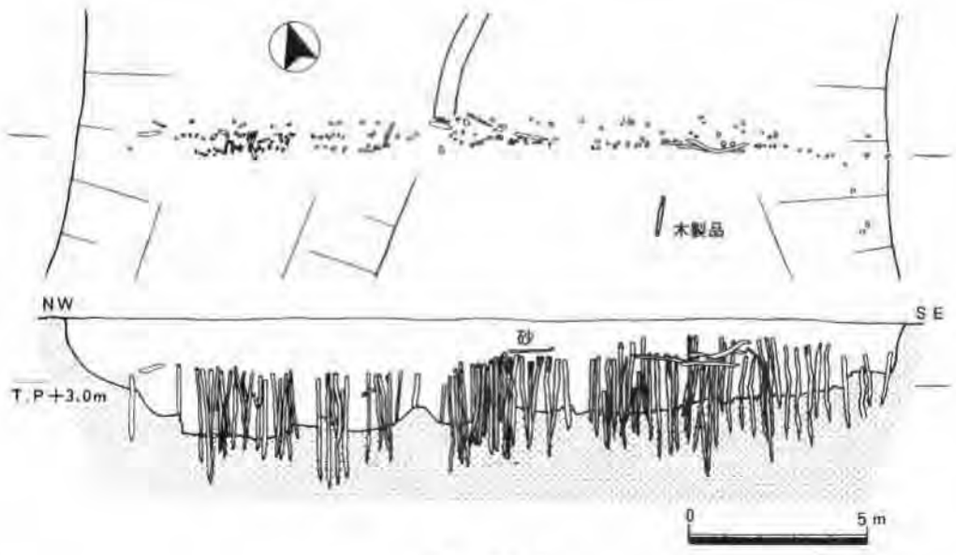
自然河川は緩やかに蛇行しながら南西から北東方向の流路をもつもので、内部は砂で埋まっていました。これを取り除くと河川中央付近から堰が２箇所見つかりました。

第３区で見つかった堰１より上流側には、左岸よりほぼ北方へ流路をもつ人工河川（幅約３m、深さ１m）と、右岸より北東方向に伸びるU字溝（幅約40cm、深さ70cm）が作られています。また人工河川にも第２区の中央で堰２が設けられており、おそらく西側の水田へ水を流したものと思われます。堰１から下流（北へ約20m）にも堰３が設けられていましたが、水田へ水を流すための水跡はありませんでした。この堰の下流側では滝壺状に深くなっており、せき止めた水がオーバーフローしていることがわかりました。

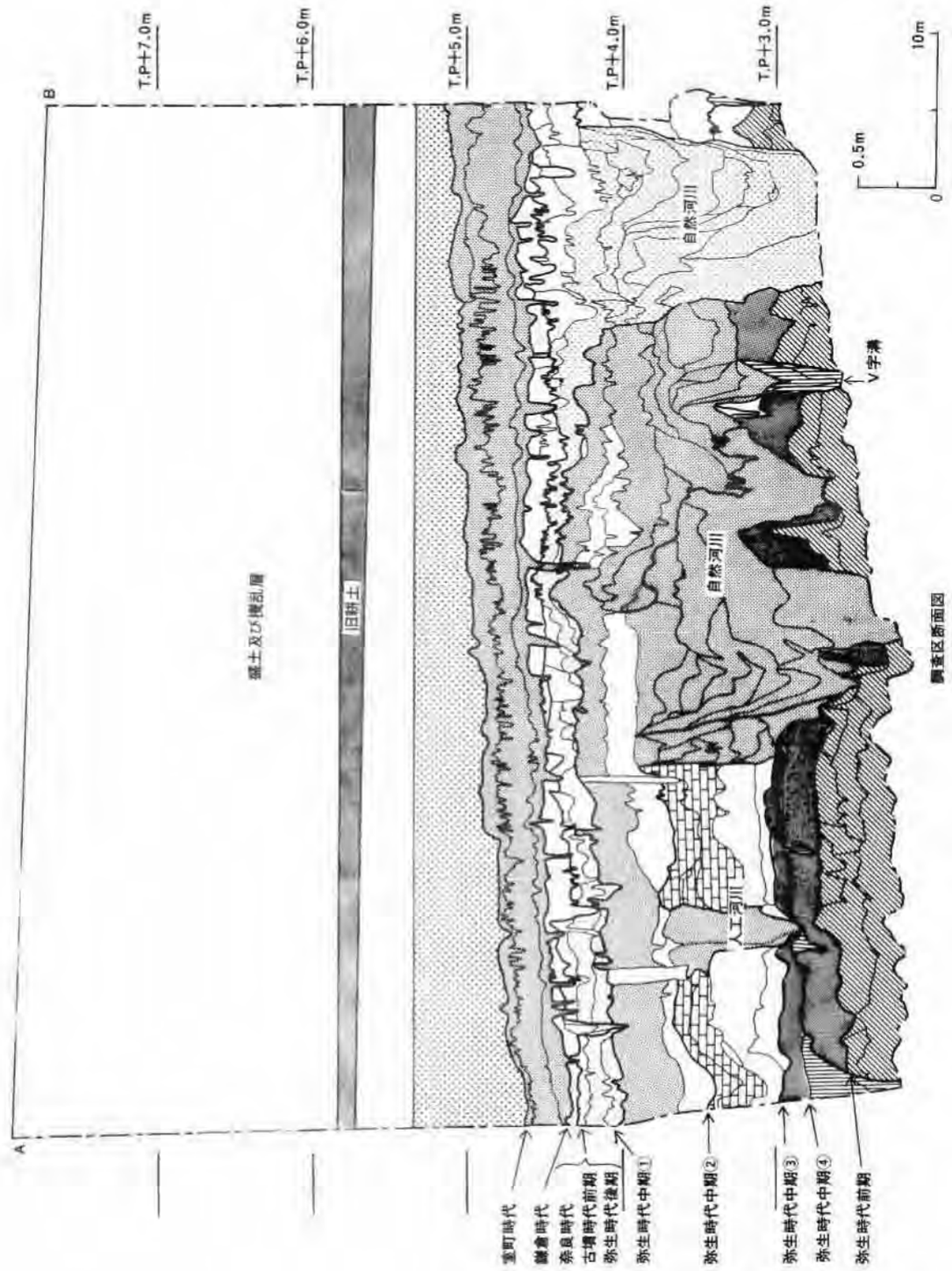
これらの堰の施設は細長い自然木の先端を尖らせて杭状にしたものを流路に直交して打付け、河の流れをせき止めています。堰３は堰１・２に比べ一段と規模の大きいもので、確認された杭だけでも178本を数えます。杭は河底深くまで打付けており、深いもので1.15mを測ります。

堰の法量一覧表

	杭例長さ(m)	杭 本数(本)	杭 長さ(m)	杭 径(cm)	河底からの杭の高さ(cm)	杭の打込みの深さ(cm)	備考
堰１	10.5	66	最小0.5 最大0.8	2 8	20 50	60	河川の上流
堰２	3	23	0.3 0.8	3 5	10 30	25 80	人工河川
堰３	11	178	0.9 1.7	2 9	40 80	15 115	河川の下流



堰３　平断面図

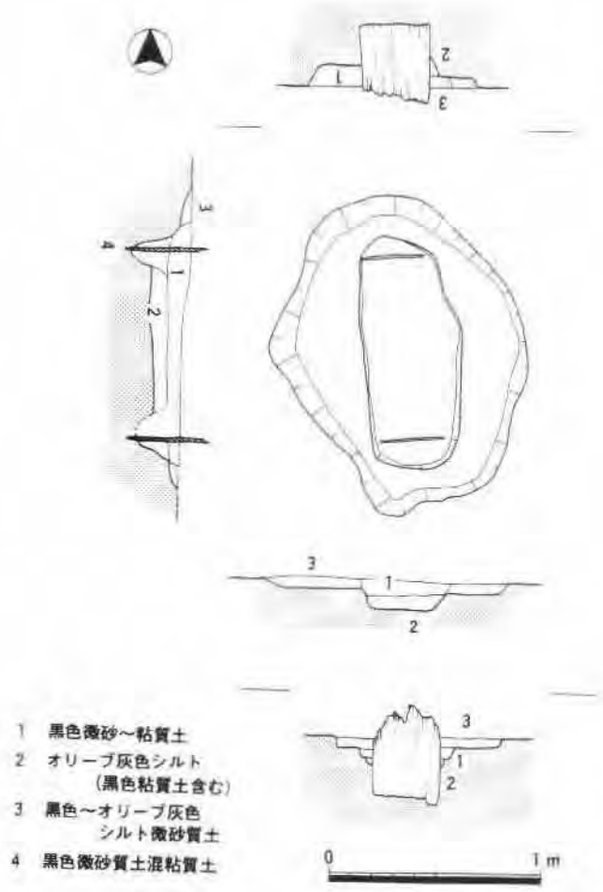


弥生時代中期－④

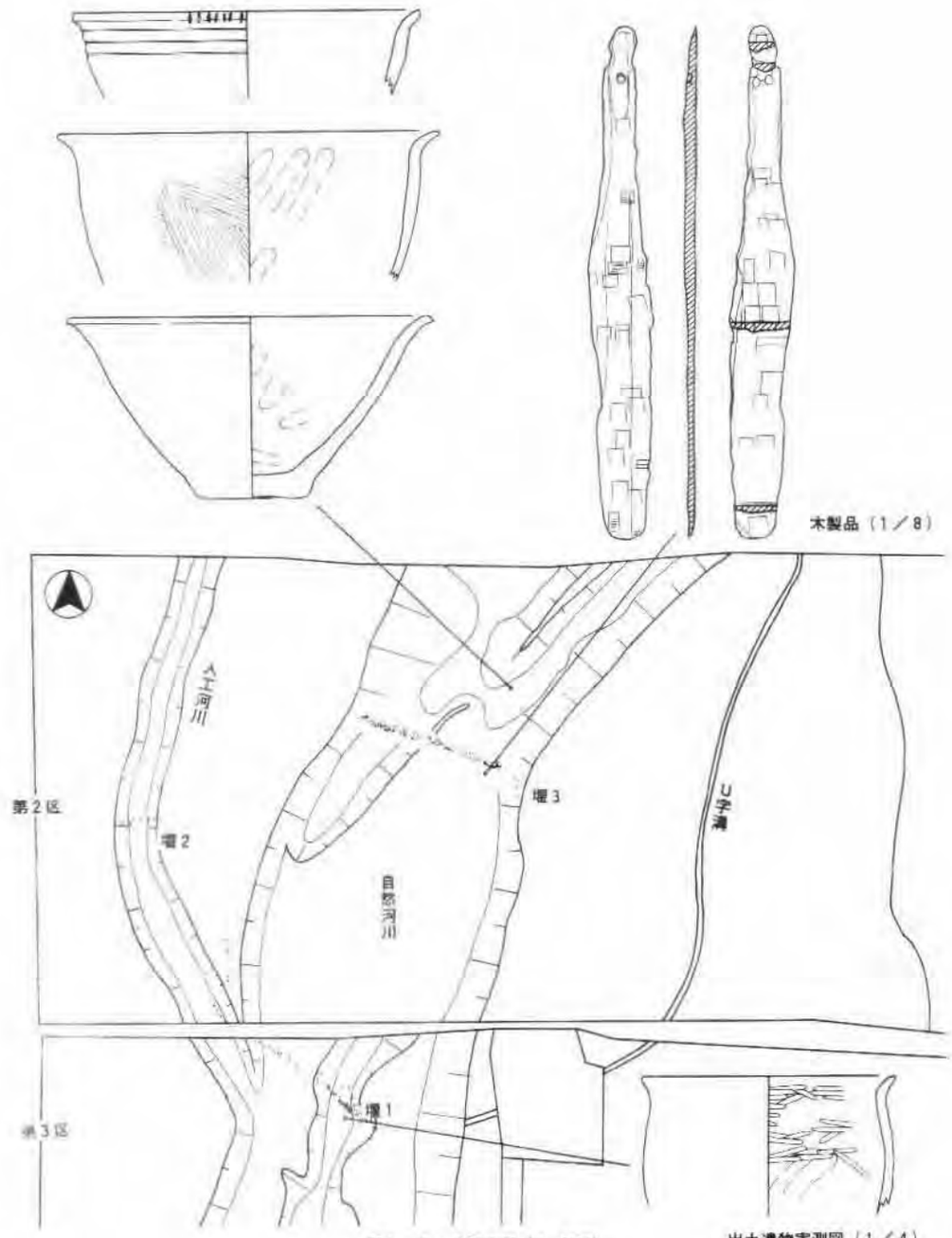
第２・３区の調査を終了しました。

大畦畔が見つかった面より一層下の上面で、木棺墓１基・土坑・溝が見つかりました。木棺墓は木口板が南と北に２枚平行に差し込んでおり、内部からは５－６才のものと思われる大臼歯（永久歯）２点が残っていましたが、埋葬品などは見つかりませんでした。

溝１は、断面Ｖ字形の溝で人工的に掘られたものです。第３区の北部では３条に分かれています。中央の溝は浅く掘られており、断面は半円形です。分岐点には杭が打付けられており、東溝から西溝に水路を変えているようです。溝２は、北東に伸びる断面Ｖ字形の溝で、この溝も大畦畔の下部で２条に分かれます。この溝の分岐点にも杭が打付けられてありました。２条の溝の時期差は現在のところ不明です。



木棺墓　平・断面図



堰１・２・３平面図（1／400）　　出土遺物実測図（1／4）

堰（せき）

「井堰」や「しがらみ」とも言われています。河川・水路に設せられる施設で、水の水位や水の流れを変えたり、せき止めたりします。昔は水田などに水を引き込むためや魚を取るために設けられていました。

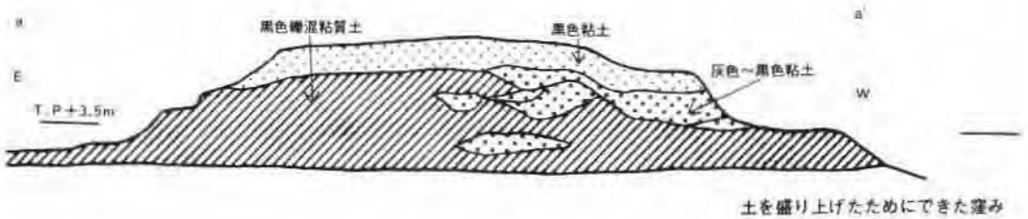
弥生時代中期－③

第２・３・４区の調査を終了しました。

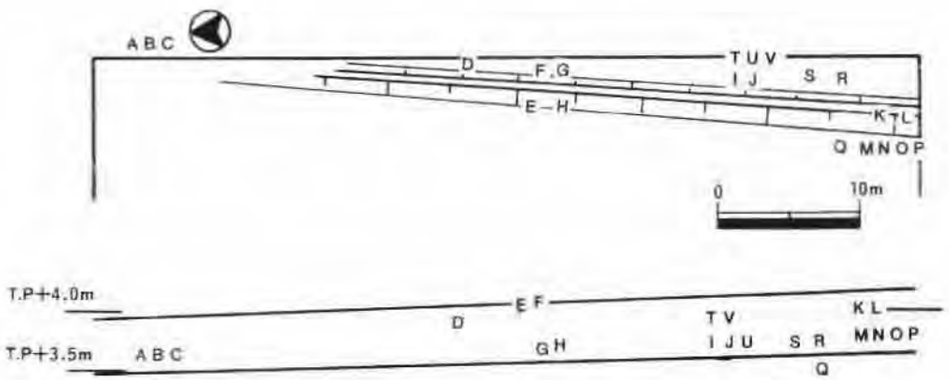
調査区全体を見ますと、水田跡は、南北に流れる河川の河底より西側と、大畦畔の南東隅で見つかりました。また第３区の中央部分では、水田を小区画する小畦畔が見つかり、南西方向へ蛇行しながら第４区の調査区外へ続きます。また第３・４区の東側では、大畦畔が見つかりました。

大畦畔と大畦畔に伴う窪み遺構の法量一覧表

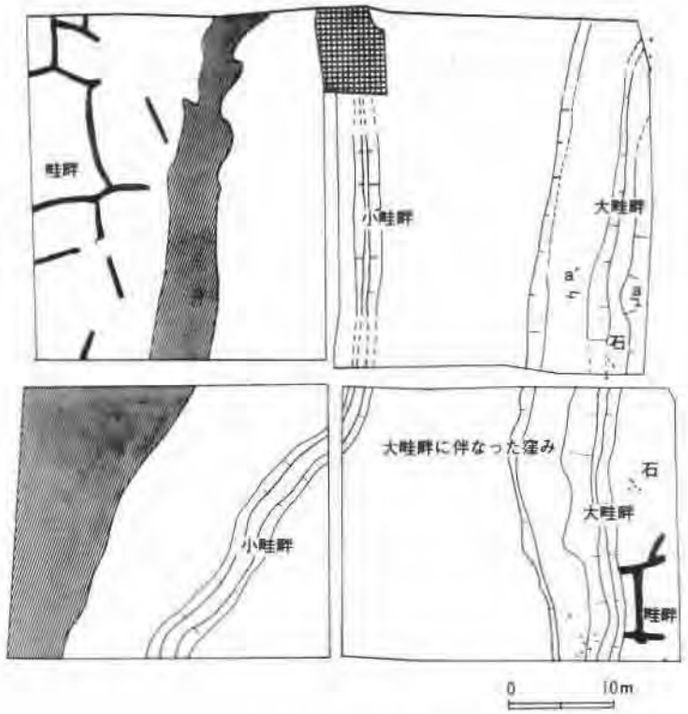
	方　向	規　模(m)				土量 (㎥)	埋土（状況）	備　考
		検出	上幅	下幅	高さ(深さ)			
大畦畔	南南西－北北東	57	0.4	3.76	0.6	71.1	黒色礫混粘質土及び石材使用。	石材は大きく３ブロックに分かれる
窪　み	南南西－北北東	57	4.9	4.5	0.27	70	暗灰色粘土	



大畦畔　断ち割り断面図（S＝1：40）

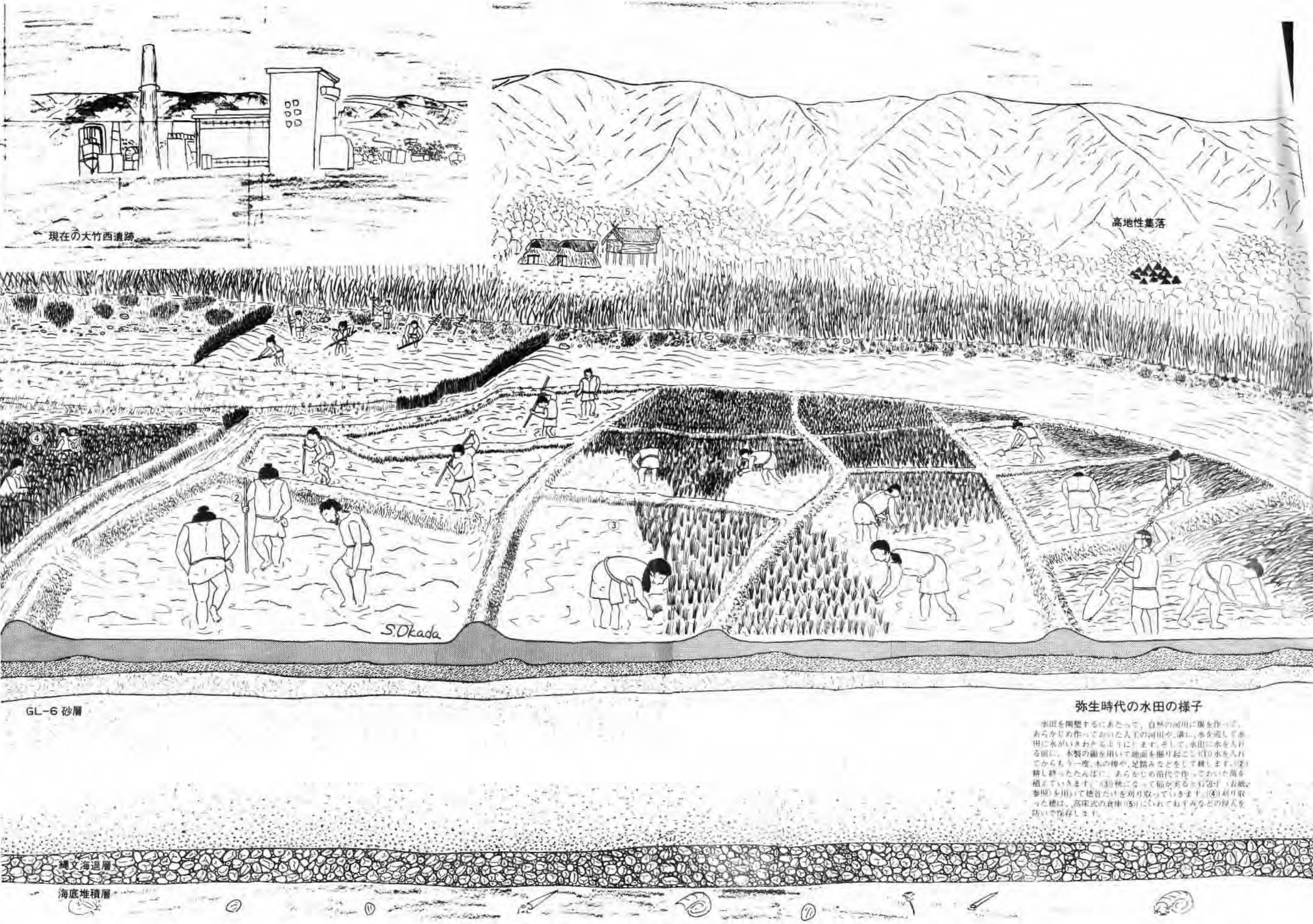


石材出土状況　平面図・見通し図



弥生時代中期－③　遺構平面図

土塁状遺構（大畦畔）
機能－農道
洪水から水田を守る。地表の高い水田面に水を留める。大竹西遺跡で見つかった大畦畔は石材をはめ込んで強固な作りとなっています。



弥生時代の水田の様子

水田を開墾するにあたって，自然の河川に堰を作って，あらかじめ作っておいた人工の河川や，溝に，水を流して水田に水がいきわたるようにします。そして，水田に水を入れる前に，木製の鍬を用いて地面を掘り起こし(1)水を入れてからもう一度，木の棒や，足踏みなどをして耕します。(2)耕し終ったたんぼに，あらかじめ苗代で作っておいた苗を植えていきます。(3)秋になって稲が実ると石包丁（表紙の参照）を用いて穂首だけを刈り取っていきます。(4)刈り取った穂は，高床式の倉庫(5)にいれてねずみなどの侵入を防いで保存します。